

## 一泊の旅、横浜へ—急いで調べたいことがあった

### 元町汐汲坂ガーデンのラブラドル

初めて乗ったみなとみらい線の終点、元町・中華街駅下車、まず方向感覚がつかめないのだが、夫は、ネットで探したお目当ての店があるという。谷戸橋まで来ると、こちらに進むと外人墓地、ウチキパンがあそこだからと、記憶もよみがえる。商店のウインドウには目もくれず、ひたすら JR 石川町駅方向に急ぎ、ZARA という店を左に折れるとそこが汐汲坂。右手に元町幼稚園の看板が目に入り、その前に小さな案内板があった。路地風の中通路を入るとケーキの棚やレジがあり、ここで注文をしていると、足元に陣取っているのが看板犬で、黒ラブ、13 歳という。さらに、奥まった中庭を突っ切ると店がある。こじんまりした、ウイーンのホイリゲのようでもある。私はプレートにいろいろのせてあるアラカルト、夫はミラノ風カツレツを注文した。あのケースの中にあったケーキも欲しいのだが、人間ドックの種々の数値が頭をよぎり、あきらめる。

### 放送ライブラリーで考えたこと

元町からは一駅歩く日本大通り駅の真上にある、情報文化センターの 9 階が放送ライブラリーの番組視聴ホールである。NHK・民放を問わず主要番組を視聴することができる。入館するとパネルまで案内され、画面の順序にしたがってタッチをしていくと、見たい番組名が印刷された利用者カードが出てくる。今回は夫が HP で検索済みだったので早かった。50 席ほどあるブースの一つで二人での視聴となった。半分ほどのブースは埋まり、ほとんどは一人での視聴である。通りがけに覗いたところでは、「北の国から」、植木等の「名古屋嫁取り物語?」、時代劇などを楽しんでいるのは、どちらかといえば熟年層である。明菜主演のミステリー? 憲法の条文が映し出されている画面、SF 風のアニメなども目に入った。利用が無料というのも魅力である。

私たちの一本目は、中国放送 1980 年放映 RCC スペシャル「GHQ 原爆プレスコード」である。中国新聞の広島原爆報道（糸川成辰氏談、以下敬称と「談」を略す）、朝日新聞の 1945 年 9 月、鳩山一郎の原爆投下批判、日本軍の残虐行為報道の仕方が問題視されての 2 日間の発行停止（森恭三）、中央公論掲載の大田洋子「屍の町」の大幅削除（長谷川鉦平）、日本映画社の記録フィルム取り上げの経緯（瓜生忠夫）、「中国文化」原子爆弾特輯号（栗原貞子）、アサヒグラフ特別増刊による原爆被害写真初公開（飯沢匡）などにかかわった記者や編集者らの証言と資料で、GHQ 検閲の過酷さを検証する。GHQ 検閲は、特に原爆による具体的な被害者数や悲惨な被害状況に及ぶ記事や写真をきびしくチェックした。また、原爆被害者がアメリカからは治療の対象ではなく研究の対象としてしか扱われなかった悲劇、原爆被害者としての発言も許されず、細々と続けられた平和集会などですら、朝鮮戦争が起こった 1950 年には非合法の集会にならざるを得なかった状況が語られる。広島の歌人深川宗俊氏のインタビューもあって、1950 年 8 月 6 日朝、福屋デパート前の集会には警官 3000 人が動員された様子などを語っていた。30 年近く前の番組ながら、現代においても通用する問題提起をしている新鮮さがあった。GHQ から「原爆の思い出はすべて消して忘れよ」という理不尽をせまられた、詩人栗原貞子氏の証言も強烈であった。さらに、原爆被害の医学研究・データはアメリカに独占されていた上に、「悲劇は終わった。後遺症はない」とさえ言い切った米軍関係者に言及する外科医原田東岷氏の話に、日本軍の海外での残虐行為や「従軍慰安婦」問題、最近では沖縄での集団自決問題への日本政府の対応を重ね合わせると、脈々とひきずる「なかったことにしたい」歴史認識に戦慄を覚えるのだった。

二本目は、長崎放送 2000 年放映、報道特別番組「神と原爆 浦上カトリック被爆者の 55 年」である。浦上天主堂による信者の 1 万 5000 人中 1 万人が原爆の犠牲になったという。長崎のカトリック信者たちも戦時下にあつては、一般市民と同様に戦争協力に甘んじ、多くの犠牲者を出している。それに加えて、なぜ浦上に原爆は落とされたのか。信者たちの怒りと悲しみ、そして祈りに揺れた半世紀を追う番組である。長崎の被爆者にとって象徴的な存在であり、自らも被爆しながら救護に奔走した永井隆医師。病床にあつて執筆した『長崎の鐘』などの著書で説いた「浦上は原爆が落とされたことに感謝しなければならない」、「浦上が神への犠牲として選ばれた」のは「神の摂理」であつた、とのことばに、ただ祈るだけだつたという一人の被爆女性信者片岡津代さんが差別や偏見に苦しみ続けたことが語られる。

一方、当時 GHQ の検閲下にあつて、原爆被害を語るができなかつた時期に、永井医師の著作だけが破格の扱いで出版されたのはなぜだつたのか。出版関係者の証言、検閲にかかわつた元米軍関係者の証言から、その裏面ともいふべき事実が明らかになっていく。『長崎の鐘』には、永井医師執筆の本文とその 7 割近い頁の付録「マニラの悲劇」が付いていた。原爆を天災のように扱っていることから、日本人のアメリカへの反感を消すことができる。「マニラの悲劇」は、日本軍のマニラのキリスト教徒殺害行為を公にすることによって浦上カトリック教徒への原爆投下を正当化できる。この二つの理由から 3 万部分の用紙が提供され、出版が許可されたというのである。多くのカトリック被爆者は、その後長い間、「神の摂理」による呪縛から逃れられない日々を送ることになつたという。

さらに、浦上天主堂の被爆残骸の保存が撤回された経緯にみる、一つの謎に迫る。1958 年、それまで仮住まいであつた教会の再建にあつて、原爆被害の悲惨さを物語る天主堂の残骸の保存は、信者・司祭をはじめ、市民 3 万人の署名、市議会全会一致、市長らの意向によってほぼ確定していた。にもかかわらず、当時の田川努市長が姉妹都市提携のため渡米したところ、その直後から保存反対を表明したのだ。また、当時の中島万利司祭も微妙に態度を変え、文部省や外務省の意向も無視できないと表明するにいたり、保存は撤回され、1959 年に新築される。市長はなぜ保存反対に変わったのか。市議会での質問に「原爆の悲惨さを物語る資料として適切でならず、平和を守るために保存する必要はない。ソ連・アメリカは原爆なくして平和は守れないという言い分であり、立場により意見の相違が出てくる問題だ」と答えている。

さらに番組では、原爆医療や被害者データを独占していた ABCC (アメリカ原爆傷害調査委員会) は長崎大学と広島大学へ 30 万ドル (1 億円) を寄付して、データの確保と通報を約し、当時の両学長に喜ばれたとのアメリカサイドの証言も語られ、私には衝撃であつた。さらに真相を究めたい思いに駆られた。

番組末尾で、カトリック信者の被爆者、片岡さんは、1981 年、ローマ法王ヨハネ・パウロ 2 世が来日した際、発表した「広島平和アピール」の冒頭「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死そのものです」を聞いたとき、「原爆投下は<神の摂理>なんかではない」という確信を得て、納得し、初めて<神の摂理>から解放されたという。以降、反核運動に身を寄せ、自ら「語り部」となる決意ができたと言つていたことは、忘れがたい。帰宅後、「長崎教区カトリック浦上教会」の公式 HP を見たが、永井博士に触れることはあつても、<神の摂理>に触れることもなく、天主堂再建の折の被爆残骸の保存に関しては「破壊がすさまじいので、保存は困難ということで」と記されるのみであつた。「事実」を継承することの困難さと覚悟を考へるのだった。

それにしても、画面をしばしばストップし、メモを取りながらの視聴は、2 本で約 3 時間半、と

もども疲労困憊の体であった。

### 「言葉の戦士 黒岩涙香と秋山定輔 明治新聞人の気概を知りたい」展

今回の横浜行きの、私の一番の目的が、この展示会だった。たしか終期も近い。会場は、放送ライブラリーとは同じ情報文化センター内の日本新聞博物館 2 階である。閉館までには少し間があるので、今日のうちにと入場する。近頃のマスメディアのだらしなさを痛感しているだけに「明治新聞人の気概を知りたい」のサブタイトルが気に入ったのである。日本の新聞史も断片的には講義を聞いたり、読んだりしているものの、『萬朝報』の黒岩涙香、『二六新報』の秋山定輔は、新聞人としての活躍もさることながら、どちらかといえば私には、涙香は大衆的な西洋翻案小説「噫無情」「岩窟王」などを量産した作家として、秋山は孫文の支援者、昭和期政界の黒幕的存在としてのイメージが強かった。

二人は、ほぼ同時代に生まれて、明治 20 年代、『萬朝報』は 1892 年、『二六新報』は 1893 年に創刊をし、ともに時代の権力、金権に対する暴露的キャンペーンと廉価で読者の獲得を競った。

『朝報』は、「簡単・明瞭・痛快」を柱に旧大名家のお家騒動「相馬事件」、著名人の畜妾調査などの三面記事、『新報』は三井財閥一族攻撃や吉原娼妓の自由廃業、たばこ岩谷天狗攻撃キャンペーンなどの記事が人気を博したらしい。同時に、『新報』の「労働者大懇親会」開催、『朝報』の社会改良運動団体「理想団」創立などに見る、イベント企画を通しての読者開拓などが注目されるようになる。

また、日露戦争をめぐっては、当初ともに非戦論を唱えたが、『朝報』は開戦論に転じた。『朝報』の涙香は新聞小説や探偵小説の翻案家としても文学の普及に寄与し、1920 年、大正半ばに没する。『新報』の秋山は政府から干渉を受けながら衆議院議員に当選するが、いわゆる露探、スパイ問題で引責辞任をする。以降、後藤新平との親交を深め、外遊などを重ねた上、孫文らへの経済的支援をし、後、政界の黒幕的存在となり、敗戦後の 1950 年に没する。両者は、日本の新聞の主流が企業型全国紙として定着するまでの間、マスメディアとしての役割を担ったのである。涙香と定輔、二人の生い立ちと二つのメディアが、あい真向う形で、時系列で展示されている。見る方としては、途中やや混乱することもあったが、まだまだ、ゆっくりと見て回りたい気持ちであった。両者が、暴露的スキャンダル記事を競っていた時代は、現在の日刊ゲンダイなどの夕刊タブロイド紙や週刊誌ジャーナリズムを彷彿とさせる。日本の新聞の生きる道はますますきびしい状況の中で、二人の新聞人のたどった軌跡は、その光りと翳もあわせて省みられるべきだと思うのだった。

### 雨の中華街、夜の埠頭

雨もポツポツ落ちだしたので、朝陽門近くの店で夕食をすませてホテルに戻る。窓からは眼下に山下公園の木立の闇と街灯が広がり、右手には、氷川丸の輪郭だけのイルミネーションが見える。ライトアップされたベイブリッジの華やかさとは対照的である。たしか去年の暮れに、氷川丸はマリントワーと一緒に 45 年の歴史を閉じたはずだ。左手の海に大きく突き出している薄暗い闇が大棧橋らしい。大棧橋といえば、高校時代の友人が女子大の被服科を出た後、ロサンジェルステキスタイルスクールに留学することになり、どういうわけか船旅を選んだ。この大棧橋でご家族と一緒にテープを持って見送った思い出がある。その後の彼女とはよく文通をしたり、頼まれては日本から資料を送ったりした。帰国後、友人は IBM に就職し、私の勤務先に近いこともあって、平河町の職場に案内されたことがあった。管理職に背を向けて仕事をするというオフィスを見せられたときは、まさにカル

チャーショックを受けたものだった。結婚後は、お連れ合いの勤務地アメリカでの暮らしが長く、帰国後はなんと自宅で料理教室を開いたり、婦人雑誌で料理を紹介したりされた。いま、その友人は横浜の病院で何度目かの入院治療に励んでいるはずである。

いつの間にか港の灯りやイルミネーションも消え、酷使した目はもうショボショボで、眠るしかなかった。

## 朝の大栈橋一鯨のせなか

窓を開ければ、朝の公園はすでにジョギングやランニングの人たちが行き交っていた。歩く人も傘はさしていない。私たちも朝食前に散歩を、と出てみると、思いがけない寒さであった。ホテルの隣の洋館は旧英国七番館、現在は創価学会の戸田平和記念館である。戸田城聖は、戦前、治安維持法や不敬罪で投獄されたこともある、二代目の創価学会会長で、1957年横浜で「原水爆禁止宣言」をしたことに由来し1979年に設立された記念館という。創価学会の施設が目立つこの境界であるが、信者や公明党は戸田の初心を忘れてはいないか。

山下公園の端に係留された氷川丸を間近で見る。案内板によれば、1930年建造、病院船、復員船として働き、その後は水上レストランとして賑わいを見せたという。日本の昭和史とともに、さらには平成の半ばまで、日本の高度成長とその後を見てきたことになる。公園内の「かもめの水平さん」の碑や「赤い靴」の女の子像などに関心を示しているのは私たち夫婦くらいだろうか。ちょうど開催中の春の花壇まつりを通り抜けると、関東大震災の折、インド人救助のお礼として寄贈されたという立派な水飲み場、インド水塔がある。修学旅行生の一団がすでに戻りかけている、大栈橋への陸橋をのぼる。しっかりと木の板が張り巡らされた緩やかな斜面を歩いていると、波を蹴る船の甲板を歩いているような錯覚にとらわれる。「鯨のせなか」の愛称がつけられたという。入江を挟んだ左手には、最近整備でもされたのだろう、真新しい赤レンガ倉庫が見えてくる。海風の寒さに途中で引き返してきた埠頭には、水上警察署や税関などが並び、ひょいと海の男が飛び出してくるような古い珈琲店や食堂がある。小さなコンビニが賑わっているようなので、思わず入り込むと、雑然とした中に、港町らしい、一見何に使うか分からないようなロープや用具が並んでいたりする。お茶のボトルやおにぎりパックを持ってレジに列をなす男性たちがいた。

## クスノキは残った—横浜開港資料館

ホテルの食堂に直行すると、その入り口に置かれた朝刊の大きな見出しに驚いた。長崎の伊藤市長が銃撃を受けて、心肺停止状態だという。昨日、放送ライブラリーで見た一本が長崎の原爆被害者たちの半世紀をたどったドキュメンタリーであっただけに、衝撃が大きい。しかし、今日は、新聞博物館での検索が最優先で、バイキングの朝食もそこそこにホテルを出る。昨夜中華街で買ったお土産の菓子や絵葉書、カタログ、着替えの洗い物などを宅急便で発送し、やや身軽になった。新聞博物館の前に、開港資料館に寄って、ちょっとのぞくつもりでの展示会「川の町・横浜」が意外と面白く、けっこう長居をしてしまった。港を支えた水運、川と橋の変遷と人々の暮らしが絵地図・絵葉書・公文書・航空写真などによりたどることができる。関内・関外地域だけでも開発によって埋め立てられた川、生まれた川の名前を地図でたどり、そこにかかる橋の姿の変わりようは、この町を知らない私をささざまざまな想像の世界にいざなってくれる。日米和親条約の時代から今日までのこの地に根を張り、

見守り続けたという中庭のクスノキには圧倒され、思わずスケッチの筆をとるのだった。連れ合いに促されて、情報文化センターの日本新聞博物館にむかう。

## CAFÉ de la Presse のランチ

一通りの説明を聞いた後、まず、「朝日新聞」の記事検索にかかる。年月日やキーワードで検索、そのリストから必要記事をクリックすると、1984年までは、新聞の紙面そのままが画面にあらわれ、必要な箇所を拡大して読めるし、周辺の記事にも目を配れる。ただ、その場でコピーが取れない。改めてマイクロ資料から検索し複写することになる。1985年以降は、検索は同様だが、記事名をクリックすると、記事の文字情報のみが画面にあらわれて、必要ならばコピーが可能だ。この便利さにコピーは4時間のどでなんと100枚近くになっていた（1枚40円）。その間の昼食なのだが、時間が惜しくて、2階のカフェのランチで済ます。旧横浜商工会館にもこんなスペースがあったのだろうか。アンティークな雰囲気のお店は、常連も多いらしく、手作りのケーキも美味しそうではあったが、再び博物館へ。他の全国紙や地方紙の所蔵期間はたぶん国立国会図書館の方が網羅性は高いが、タイトルによっては、検索やコピーは、ここの方が便利なのではないか。

再訪を期して、みなとみらい線、日本大通り駅直行のエスカレーターへと急ぐのだった。

(2007年4月17日泊。4月28日記)